

「早く見つけて」無言の叫び

プレミアムA



はか死
たす独
なて孤
あ誰ル
ボ

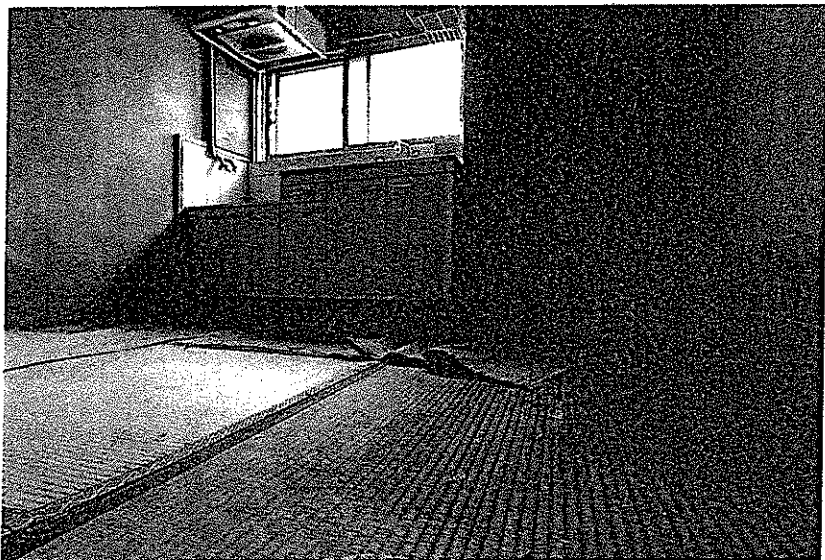
昨年12月4日、大阪府豊中市。記者は築50年を超える木造アパートの前に行った。

シャワーキャップに似たヘアキャップ、靴のまわりに足カバーをつけてる。「虫が入ってこないように靴下の中にスポンの梱を入れた方がいい」。以前に捜査員からこう言われたのを思い出し、その通りにした。記者がこれから向かうのは、遺体が見つかっていた一室だ。

誰にもみとられずに死後、時間が経過してから見つかる孤独死。年間数万件に及ぶとも言われるが、全国的な統計はない。高齢化社会が進む中、より深刻化しているとの指摘もある。いま何が起きているのか。記者はその実情を取材するため、大阪府警の協力を得て、現場に同行した。

山元雅彦(59)は、孤独死を含め、死因が明らかでない遺体について事件性の有無を見極める検視官。記者が現場に着いたとき、山元はアパートに入るところだった。廊下を進むと、臭気が迫ってくる。そのとき脳裏に浮かんだのは、あるベテラン捜査員の言葉だ。

「遺体の臭いはな、『早く見つけ



布団の上 誰にもみとられず

てくれ』という死者の叫びなんや」廊下の奥の5号室。捜査員がドアノブを軽くひねると、きしみながら扉が開いた。机の上にはスプーンが入った鍋や皿がそのまま。時間がとまったかのような4畳半一間の布団の上で、男性が倒れていた。

おそらくはこの部屋の住人なのだろうが、そう断定する根拠はない。その遺体を前に山元は目を閉じ、そっと手を合わせる。左手首の透明な数珠が、揺れた。

「最終(の生存確認)は？」

「大家が1カ月前にアパートで会

話

「お金は？」

「15万5千円あり」

「発見時の室内温度は？」

「26・0度」

山元の問いに、捜査員がよどみなく答える。そこから事件性の有無が判断される。2012年に検視官になった山元が向き合った遺体は約1600体。数珠はなりたての頃からつけている。その意味を尋ねると、こう教えてくれた。

「ホトケさんね、行くところなかったら、どうぞ俺について来いよって」

30分ほど調べた後、山元は遺体を豊中南署へ運ぶよう指示した。死因を調べるとともに、身元を特定するためだ。記者の目の前で、遺体が担架に乗せられ、運び出されていった。

孤独死が深刻化する中、大阪府警は昨春、検視調査課の態勢を強化した。ある府警幹部は、こう言う。

「確実に件数は増えている。減らすよう取り組みなければ、警察は、いずれそれだけで手いっぱいになるだろう」

敬称略

2面に続く

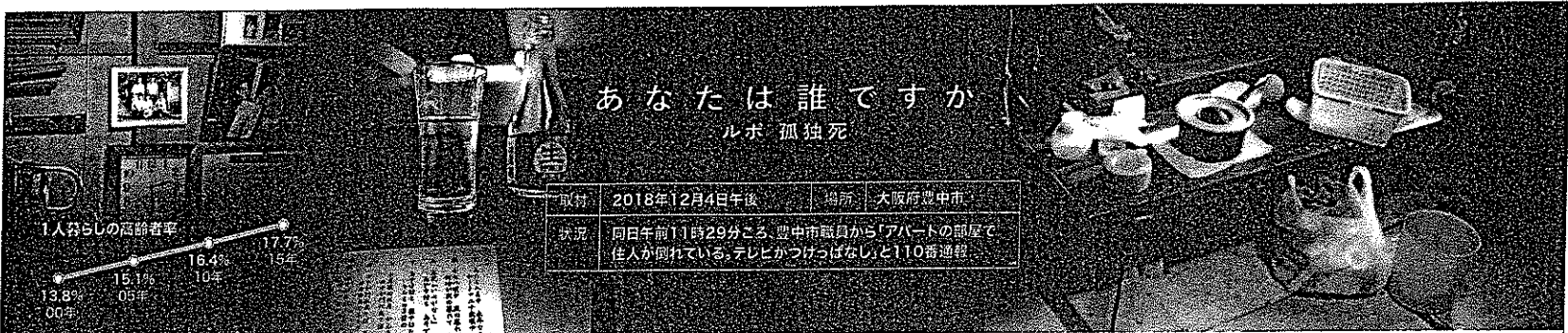
よりすべりのニュースやルポルタージュを、紙面とデジタルを駆使して伝える「プレミアムA」。今回の「あなたは誰ですか ルポ孤独死」



デジタル版では、記者が様々な現場に赴き、現状をリポートしています。

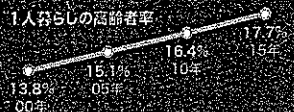
男性の遺体が見つかったから4カ月。4畳半一間の部屋は整理され、がらんとしていた。畳には、遺体の跡が残っていた

11月4日、大阪府豊中市、小川智撮影



あなたは誰ですか

ルボ 孤独死



取材 2018年12月4日午後 場所 大阪府豊中市
 状況 同日午前11時29分ごろ、豊中市職員から「アパートの部屋で住人が倒れている。テレビがついておらず」と110番通報

かまわんとって 82歳 心は奄美に

1面から続く

男性の遺体が見つかったアパートの周囲には、数年前から大阪府豊中市のアパートの一角に、大勢の女性が「お嬢さん」呼ばわりで暮らしていた。遺体は発見された部屋に渡り、1カ月前に亡くなったと推定された。

「金の卵」鳥離れ都会へ

遺体が見つかったアパートの約半、離れた郊外に暮らす男性の生家があった。大阪府豊中市のアパートの一角に、大勢の女性が「お嬢さん」呼ばわりで暮らしていた。遺体は発見された部屋に渡り、1カ月前に亡くなったと推定された。

「金の卵」鳥離れ都会へ。大阪府豊中市のアパートの一角に、大勢の女性が「お嬢さん」呼ばわりで暮らしていた。遺体は発見された部屋に渡り、1カ月前に亡くなったと推定された。

「金の卵」鳥離れ都会へ。大阪府豊中市のアパートの一角に、大勢の女性が「お嬢さん」呼ばわりで暮らしていた。遺体は発見された部屋に渡り、1カ月前に亡くなったと推定された。

ものから、足跡をたどった。

手がかりのひとつは、発見された部屋の壁紙。壁紙の柄は、大阪府豊中市のアパートの一角に、大勢の女性が「お嬢さん」呼ばわりで暮らしていた。遺体は発見された部屋に渡り、1カ月前に亡くなったと推定された。

「寂しい葬式」兄の後悔

寂しい葬式「兄の後悔」。大阪府豊中市のアパートの一角に、大勢の女性が「お嬢さん」呼ばわりで暮らしていた。遺体は発見された部屋に渡り、1カ月前に亡くなったと推定された。

寂しい葬式「兄の後悔」。大阪府豊中市のアパートの一角に、大勢の女性が「お嬢さん」呼ばわりで暮らしていた。遺体は発見された部屋に渡り、1カ月前に亡くなったと推定された。

寂しい葬式「兄の後悔」。大阪府豊中市のアパートの一角に、大勢の女性が「お嬢さん」呼ばわりで暮らしていた。遺体は発見された部屋に渡り、1カ月前に亡くなったと推定された。

増える単身高齢者 高まる孤独死リスク

民間調査機関「ニッセイ基礎研究所」は2011年、65歳以上の高齢者が自宅に死亡し、死後2日以上経過したケースが全国で年間2万7千件にのぼると推計した。平均すれば1日に70件以上。「実態はもっと多いはず」とする専門家もいるが、孤独死の明確な定義はなく、国全体の実際を示すデータはない。日本社会が急速に高齢化する中、「単身化」も進む。総務省によると、高齢者数に占める一人暮らしの割合は00年に13.8%、15年に17.7%に。国立社会保障・人口問題研究所は、40年に世帯主が65歳以上の高齢世帯のうち、約40%が一人暮らしになると推計した。家族の形が容縮したことにより、「孤独死リスク」が増大していくといえる。明治学院大学の河合克敏名誉教授(社会福祉学)は原因を探ると、高度経済成長期に行き着くとの

立場だ。「当時の政策として、太平洋ベルト地帯を中心に工業配置がなされ、都市部での労働力不足は農村からの集団就職で、その後は出稼ぎという形で補われた」。その結果、人が減った農村部、新たに流入した都市部いずれでも地域のネットワークや家族のつながりが希薄化したといえる。不安感こそ若年層にも広がる。朝日新聞の世論調査では、自分が孤独死することを「心配」と答えた人は、29歳以下をみると10年の40%から18年は57%に増加。河合氏は「経済的に安定し、社会とのつながりがある老後を、すでにイメージできなくなっていることの裏ではないか」と話す。

深く深く
プレミアム A

近頃デジタルでよりよりのニュースやカルチャーが求められる「プレミアム」の第3弾は、あなたに合わせた「孤独死」デジタル版。は、個別化する現状を伝え、解決の糸口を提示。多面的な視点を取り出している。「調査」は、孤独死する方向に生きるかを自身が自分で決める。現役で定年する年齢や収入を特定する。資料を添付して郵送に送る。お問い合わせ先はこちらです。
<https://www.asahi.com/special/undead.html>